

# ウィラーヤテ・ファキーフに関する管見

ドクトル・アブ・ル・カーセム・ゴルジー

## 法学者は預言者の後継者である

ウィラーヤト（監督権）とはなにか？ ウィラーヤトとは、創造的ウィラーヤトと立法的ウィラーヤト、本質的ウィラーヤトと法学的ウィラーヤト、その他の分類を含む広い意味で、ある事柄への介入専断の権能を意味する。そしてこの専断権はあるものの創造、抹消、あるいは本質的変更、あるいはあるものの抽象的（いわゆる法学的）状態の創造、抹消、変更についてのものである。それどころか、この専断権は他者に関わる事柄にも、あるいは専断権行使者自身に関わる事柄にもおよぶものである。

## 創造的ウィラーヤトと立法的ウィラーヤト

既に指摘したように、ウィラーヤトは2種類ある。創造的ウィラーヤトと立法的ウィラーヤトである。

創造的ウィラーヤトとは、監督者が直接に（監督権に基づいて）、また自己の意志に基づいて、あるものをつくりだしたり、抹消したり、あるものの状態を変化させたりすることができることである。この種のウィラーヤトはおのずから、また他のものを必要とすることなく神に帰属するものである。神はみずからいっておられる。「ただ神は命じるだけである、神はあるものを欲するとき、あれ！という。そうするとそれは存在する（クルアーン；36：82）」、「神はあらゆるものに権能をもつ（同；27：32）」。宗教指導者たちは、「神が欲したものが存在し、欲しなかったものは存在しない」といっている。

もちろん、神の意志と希望にしたがって、この種のウィラーヤトはだれにでも帰属する。ただし、この種のウィラーヤトの外界への出現は、奇跡と聖蹟の証明によってのみ預言者たちと（シーア派の）イマームたちに帰属する。神は、「風をスライマーンの意のままに吹くようにした（クルアーン；38：

36)」といわれておられる。また、「私（イエス）はあなたがた（イスラエルの民）のために泥で鳥の形をつくろう。そして、その中に聖霊を吹き込もう。そうすれば、神の命により鳥になるであろう。生まれつきの盲も癩者も神の許しをえて癒してやろう。死者を神の命をえて蘇らせよう（同；3：49）」ともいっておられる。

しかしながら、預言者とイマーム以外の者たち、なかでも、イスラーム法学者には、この種のウィラーヤトが帰属するということについて信頼できる論拠はなにもない。むしろ、この権能が神にのみ占有されるということの意味は神以外のものにとっては、それが存在しないということである。また、預言者とイマームにとってさえも、結局は神の命によってのみこの権能が帰属するのである。

しかしながら、立法的ウィラーヤトは他人の事柄についての専断権、あるいは、普遍的立法権、あるいは審判権や敵意の解消の権利、あるいは現世的支配権や指導権、あるいは財産および生命に関する専断権などを意味している。疑い無く、この種のウィラーヤトもまたもともと神に専属する。そして、このような理由で神に立法権（すなわち法を与える者）、支配者、監督者《Wali》などの称号がつけられているのである。それは創造的ウィラーヤトの観点から神にたいして創造者、造物主、造形者などの称号が与えられているのに対応している。もちろん、神はこの権限を直接に預言者たちに与え、そして預言者を通じてイマームたちに与えている。

預言者たちに服従することの義務について、神からくだされたり、あるいは時として神の許しを得て預言者自身が定めた規定において、次のようにいっている。「神と使徒とあなたがたのうちで權威をもつ者にしがいなさい（クルアーン；4：59）」。また、次のようにも言っている。「預言者がもたらしたものを取りなさい。そして預言者が禁じたものをすてなさい（同；7：59）」。さらに、「神の使徒はあなたがたにとりよき先立である（同；33：21）」、「預言者よ、かれらに言うがよい。神を愛しているのなら、私

に従いなさい（同；3：31）」など。

預言者の現世的支配権については、誠に、「あなたがたの守護者は神とその使徒と信仰をもち礼拝の努めを守り喜捨を行いぬかずく者たちである（同；5：55）」。

預言者の財産および生命にたいする監督権については、「預言者は信者の《財産、生命》に信者自らよりも適格である（同；33：6）」といっている。  
《訳者注：クルアーンの原文には“財産、生命”の語句はない》

さらに、聖句「神と使徒とあなたがたのうちで権威をもつ者にしがいなさい（前出）」ならびに「預言者の命に背くものには災難がくだり痛烈な業罰が科せられることを注意してやれ（同；24：64）」に基づき、預言者の個人的、公的命令に背くことができない。そして宗教法の命じることに従う義務は特定されていない。

これらの証拠やそのほかの証拠により、預言者がこれらのすべてのレベルで人々にたいしてウィラーヤトをもっているように、イマームもまたこれらすべてのレベルにおいて人々にたいしてウィラーヤトをもっている。このことについてもたくさんの証拠があるが、そのうちの二、三を述べるのにとどめておこう。

(1) 聖句「神と使徒とあなたがたのうちで権威をもつ者に従いなさい（前出）」のなかの“権威をもつ者”の意味はシーア派の解釈と伝承によれば、シーア派のイマームのことである。<sup>1)</sup>

(2) 聖句「誠に、あなたがたの守護者は神とその使徒と信仰をもち礼拝の努めを守り喜捨を行いぬかずく者たちである（前出）」のなかの“信仰をもち”から終わりまでは、シーア派とスンニー派双方の解釈で、信徒の長アリー・イブン・アビー・ターリブについて下されたものとされている。<sup>2)</sup> 信徒の長と他のイマームたちの間には、この問題に関してまったく差がない。むしろ、法学者たちがいっているように、啓示が下された場合の特殊性も、決して聖句の一般性を消してしまうことはないのである。したがって、たとえその対

象とそれが下された事情がアリー・イブン・アビー・ターリブにだけ関係があるにしても、この聖句は普遍的であり、すべてのイマームたちを含むのである。

(3) 預言者に帰属するものはすべてイマームたちにも帰属するということを証明する多くの伝承がある。イマームたちは権威をもつものであり、かれらに従うことは義務なのである。彼らは神の恩寵の媒介者である。世界とそこにあるものはかのイマームに由来しているのである。彼はどのような専断を欲しても、することができるのである。彼らは神の恵みの保持者であり、神の証なのである。預言者の家族はかれがウンマの民の間においたもので、人々がそれに信従しなければならない2つの重りのうちのひとつである。この他多くの論拠がある。<sup>3)</sup>

このような伝承が全体として、彼らの言葉が諸規定について証明となり、彼らの支配権が国にたいして影響力をもち、人々の財産、生命についてウィラーヤトをもち、さらに、公的、私的な事柄において彼らに従うことが義務であることを示していることは明らかである。

ここまでは、預言者とイマームのウィラーヤトについての説明であった。次に、法学者の監督権 (wailayāt-e faqīh) について説明しよう。

## 法学者の監督権

法学者の監督権に関しては前提として2つの主題を説明しておかなくてはならない。第1は、立法的ウィラーヤトが5つの項目を含んでいるということである。

(1) iftā (法令を出す権利)：すなわち、法学者がその信徒に出す法令が明証と信頼性を持つということである。この項目は預言者とイマームについて認められている立法権や法令解釈権に類似している。

(2) qadā (裁定権)：すなわち、互いに争っている2者の間で法学者が出す裁定が明証性と有効性を持っているということ。

(3) 人々の中の現世的事項についての支配権と指導権：換言すれば、政治、社会、経済および戦争、和平、税金、文化、教育と養育、商業、工業、農業、衛生などのもろもろの人間的事項に介入する権利、すなわち、政府が国民にたいして行う事と同じことである。

(4) 人々の財産、生命に対する専断権：すなわち、喜捨（ザカート）やその他の宗教上の納付金の様に財の支払いを人々に強制する権利、あるいは他の財の支払いを強制する権利、もしくは人に自らを死におもむかせる権利。

(5) 私的命令：水や食物をもってくる、建物をつくること、服を縫うこと、などについてのものである。

第2は法学者が誰であるかを知らねばならぬということである。

ファキーフ（法学者）すなわち、フィクフをもっている者のことである。したがってフィクフとはどういう意味であるかを見なければならない。アラビア語であるフィクフはその語義は理解するという意味である。<sup>4)</sup>あるいは特に未知の問題を既知の問題を通じて理解するということである（いわゆる思弁的問題の理解）。<sup>5)</sup>それ故、ファキーフとは比喩的形容詞もしくは名詞の強調形であるのだが、このような理解力をもっている人のことである。しかしながら、この場合のフィクフの意味は今言ったような意味ではなく、むしろ、イスラーム法の述語上の意味である。

宗教上の法規や派生的な問題を知っているという意味でのフィクフはそれにふさわしい証明に基づいている。それにふさわしい証明とは、

(1) 神の書物（クルアーン）。明らかにこの気高い書物だけがすべての宗教上の規定を説明することができる。

(2) イスラームの預言者およびかれらの後継者たちのスンナ（慣行）、すなわち、かれらの行為、言葉、承認。明らかに行為、言葉、承認の意味することは行い、話しおよび宗教上の規定を説明する場合の承認である。ただし、個人的、および日常的な事柄についての説明に関する行為や言葉はいかなる

法規の証拠ともなうことができない。

行為と言葉の意味するところは概ね明らかである。しかしながら、承認が意味するものは他の人々の行為や意見表明にたいして沈黙を守り、禁止すること、あるいは反対意見を述べることができるにもかかわらず、禁止もしなければ、反対意見も述べないということである。彼らが正しくないことにたいして沈黙をまもってはならないという義務があるとうことに鑑みれば、この沈黙はその行為およびその意見の正当性を認めているということの意味する。例えば、ある人が預言者の見ている前で贈り物の売買をしたとする。あるいは、その行為に関して正しいと判断したとする。そして、預言者がそれについて沈黙を守ったとすれば、この沈黙は確かに贈り物の売買の正当性を認めたことを意味している。

(3) イジュマー（合意）。聖なる立法者の意向を明らかにするように学者達の見解が一致すること。

(4) 理性、すなわち、それによって法学的判断に到達することができる理性的判断のことである。従って、この証明によって法学的判断に到達することができる人がファキーフと名付けられている。法学者の監督権という意味はこのような人の監督権という意味である。

上記の前提が明らかになったので、今述べた意味での法学者はこれまで述べたいずれの事項に対して監督権を持つのか、またどれに対して監督権を持たないのかということの議論に移る。もちろん、監督権の帰属という問題についてはもろもろの条件がつけられている。すなわち、生きてること、正義、そしてまた時には高い学識、といったものである。が、それらは当面の議論とは関係がない。

監督権の第1の要素、すなわち、法令を出す権利。この監督権は確実にファキーフに帰属する。純粋な大衆、あるいはたまたま多くの知識をもっているがイジュティハードのレベルには達していない人も含めて自らイジュティハード（イスラーム法を解釈することの免許皆伝）のレベルに達していない

人にはファキーフの法令が明証と信頼性がある。この法令の明証性およびムジュタヒド（イジュティハドの免許を持つ法学者）以外のものがムジュタヒドに服従することをタクリード（信従）と呼ばれている。これについてはいくつかの証明がある。

(1) 旅立ちの聖句：「もちろん、信徒のすべてが出征してしまってはならない。かれらのうちのあるものは宗教の研究をしていて、帰ってきた人々に教えてやり、その人々が気をつけるようにしてやらなければならない（クルアーン；9：122）」は、宗教研究と宗教研究に従事するものに人々が服従することの相互的義務を意味している。（taqlid）

(2) 質問の聖句「問題が分からないときには、物知り人にたずねなさい（同；16：43）」もまた無知なる者が物知りの者に質問し服従する義務を意味している。

(3) 多くの伝承が法学者やハディースの伝承者や法規に通暁する者たちの裁定と法令の明証性を指摘している。その中でも、証明のイマームのイスハーク・ビン・ヤアクブへの命令が（有名で）ある。すなわち、「偶発的な事件の判断については、我々（イマームたち）の言葉を伝えている者にたずねなさい。」また、タバルスィーの立証の伝承「法学者のうちで自らが罪を犯さないように注意し、自分の宗教を守り、欲情を押え、自分の師の命に従うものに大衆は信従しなければならない。」<sup>6)</sup>もある。

(4) 賢者の方法と習慣に従う法学者の法令の明証性の最も重要な証明は、常に無知なる者は自分の問題について、とりわけ理論的な問題について物知りの者に尋ね、彼らに服従するということに基づいている。宗教上の問題における信従はこの原則のなかに含まれている。聖なる立法者もこの方法を保証している。

監督権の第2の要素は、すなわち、論争している2人の者の間で法学者が裁定し審判することの有効性。この類のウィラーヤトも、疑い無く法学者に帰属する。このウィラーヤトが法学者に帰属する事の証明には、一群の伝承

がある。ここでは、そのなかの幾つかを挙げておこう。なかでも有名なのはアブー・ハディージャの伝承として知られているものである。この伝承は『カーフィー』、『タフズィーブ』、『法学者を必要とせず』等の書物の中で様々の出典と多様な文体で伝えられている。アブー・ハディージャはイマーム・サーディクについて次のように伝えている。

「自らの係争を不正な裁判官のもとへ持ち込むのを注意しなければならない。むしろ、あなたがた自身のうちで我々の裁定についてある程度知っている人間に目を向け、その人を自分たちの裁判官にきめなさい。私はそのような人をあなたがたが係争を持ち込む裁判官に定めたのである。」<sup>7)</sup>

もう1つの伝承はウマル・ビン・ハンザラの伝えたものである。この伝承の中で係争を不正な為政者や裁判官のもとに持ち込むことを禁じたあとで、イマーム・サーディクは次のようにいっている。「あなたがたのうちで、我々（イマームたち）の言葉をつたえ、我々が認めた物、禁じた物に注意し、我々の規定を知っている者に注目しなさい。その人の裁定に満足しなさい。私はその人を裁判官としたのである。彼が我々の規定によって裁定して、受け入れられなければ、神の裁定が無視されたのであり、我々が拒否されたということである。我々を拒絶する者は神を拒絶する者である。」<sup>8)</sup>

監督権の第3の要素、すなわち、法学者の政治、経済、社会、軍事、その他もろもろの現世的事柄についての法学者の支配権と介入権。一部の人々はこの種のウィラーヤトは学者たちの間で論争の的になっていると考えられている。しかし、私の考えではこれが論争的であるとは思えない。むしろ、論争的になっているのは第4の要素のほうである。これではない。この要素に関しては、『アワーイド』という書物におけるナラーキーの言葉がその肯定についての意見の一致の補助となしうるということに加えて、多くの証拠がそのことを示している。そこで、それらの証拠のうちの幾つかを示してみよう。

(1) 最初に示したように、この種のウィラーヤトはそのリアリティーを表

象することがその肯定判断を帰結するようなものである。というのは、イスラームの法や規定の大部分は裁判規則、証言規定、罰則、応報規定、血の代償、宗教税、防衛、停戦、人頭税、地租、分配規程、土地法、公共財、巡礼、金曜礼拝と団体の規程、宗教指導、善行の奨励と悪行の禁止、等のように司法、刑罰、政治、経済、社会等に関わるものである。果たしてこれらの規程は個々のものにたいして定められたのではない、ということができるのであろうか？ 果たして、これらの規程の実行の時代はイスラームの始まりの時期にのみ特定されるもので、ほかの時代には実行されないものであろうか？ 果たして、これらの規程の実行は、無知な人間の手にゆだねられていた、とすることができるのであるのか？ 良くない人間の手にゆだねられてきたとすることができるのか？

したがって、これらの規程の執行者は管理運営能力があり、正義を施行し、諸条件を満たしている法学者である以外に道はない。あるいは、すくなくとも、そのような人から任命された人でなければならない。いわゆる、条件完備の法学者がその人を監督するのである。なぜなら、彼の法学者こそがこれらの事柄の専門家であり、知悉しており下心もなく清らかであるからである。より簡潔にいうならば、もしもウィラーヤトの最も重要なこの要素が確立しなければ、法規の大部分の実施が無効になっていしまう。それゆえに、預言者とアリー・ビン・アビー・ターリブはそのために幾人かの人を任命したのである。このために、預言者とイスラームたちは法学者を自らの証明とか代理者とか後継者とか名付けているのである。ファズル・ビン・シャーザーンがイマーム・レザーについて語っている伝承の意味はこの意味である。すなわち、

「我々は、宗教や現世の事柄について必須のものごとにたいする監督者や指導者をもたないようないかなる集団も民もみたことがない。したがって、聡明極まりない創造主の叡知は被造物を彼らにとって不可欠のものごとやそれなしでは生活がなりたたないような事柄のために指導者を立てることなく放置することはない。」

という伝承である。

(2) 既にその一部を述べたウマン・ビン・ハンザラが伝えた伝承の明らかに意味しているものは、特に前記の要素と併せて、ウィラーヤトのこの要素をも意味している。

(3) 預言者は3度次のように言ったと伝えられている。「神よ私の代理の者たちに恵みをたれたまえ」と。すると、あなたの代理人とは誰のことか？と質問があった。すると、預言者は「私の後に来て、私の言葉と慣行を伝え、それを後の世の人々の教える人である」と答えた。

(4) ホセイン・ビン・アリーの伝承に、「あらゆる法令や規定は神を知る人でしかも信頼できる人の手によって、神の許可と禁止に基づいて運用されねばならない。」というのがある。

(5) そのほか多くの伝承がある。例えば、「学者は預言者の後継者。法学者はイスラームの砦」とか、証明確立の伝承などである。<sup>9)</sup>

ウィラーヤトの第4の要素、すなわち、他人の財産、生命にたいする法学者の監督権。この種のウィラーヤトの根拠の論証についても、全体的には意見の差異はない。議論の余地があるとすれば、その範囲に関するものである。筆者の考えでは、この種の議論の元となる物はウィラーヤトの第2、第3の要素における法学者の権限が制限されていることに由来している。第2、第3の要素における法学者の権限が拡大することで、この第4のものも概ね先の2つのものから必然的に出てくるものとなっている。この問題にかんするウィラーヤトについてはまったく議論の余地はない。

ウィラーヤトの第5の要素、すなわち、個人的な命令について法学者に従うことの義務について、確信をもって言えることは、この種のウィラーヤトは法学者に帰属してないということである。というのも、このような事柄について法学者に服従する義務を証明するものがなにもないし、原理的に服従無用である。

## 結 論

以上述べられたことに鑑みて、結論としていえることは、法学者とはイスラームの諸問題の専門家であるということである。さらに、人はいかに些細なことでも専門的知識のないものの手にそれを委ねるのを潔しとしないと言うことから、イスラームの問題についても、ムスリムは専門家でないものの手にイスラーム国家（ウンマ）の事を託するのを認めることはできない、ということである。したがって、法学者のみが明らかにされた証明に基づいて、国家運営の適正を有するのである。法学者の監督権（ウィラーヤテ・ファキーフ）を否定するものは、悪意や敵意によるものでなければ、その本質をその本来の意味において理解していないのである。